

令和 6 年 6 月 19 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00391

研究課題名（和文）検閲に抗して：トマス・ハーディ『日陰者ジュード』の創作過程の解明

研究課題名（英文）Resisting Grunyism: Thomas Hardy's Creative Processes in 'Jude the Obscure'

研究代表者

上原 早苗 (Uehara, Sanae)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：00256025

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：研究者の間には、ハーディが『日陰者ジュード』（Jude the Obscure）執筆時に雑誌編集者の「検閲」を受け、性的な挿話・表現の多くを削除・修正せざるをえなかったとの言説が流布している。それに対して本研究では、ハーディの自筆原稿および初版校正刷への書き込みを解読することで、『日陰者ジュード』の創作過程に迫り、従来の説には解消されえない、編集者への抵抗とも言つべきハーディの改変作業に光を当てた。「検閲」に抗ってハーディが表現をエロス化してゆくプロセスを、生成批評版という形で可視化させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の検閲研究では、「検閲」を出版社対作家、検閲者対被検閲者という二元論的図式で語る傾向にあるが、本研究では、そうした図式には解消されえない編集者と作家の「奇妙な」関係を浮き彫りにすることができた。また、従来のハーディ研究では、伝統的な書誌学に従い校訂版を編纂してきたが、本研究では、校訂版では可視化されにくい、本文改変の軌跡を触知しうる生成批評版を編纂することができた。なお、研究成果は研究代表者の単著（2025年10月刊行予定）によって社会に広く発信する。（注：生成批評版とは、バルトやクリステヴァなどのテキスト論を直接の淵源とする生成論的アプローチを導入したエディションのことである）

研究成果の概要（英文）：It is widely acknowledged among Hardy scholars that he was compelled to tone down the sexual elements of 'Hearts Insurgent' (which later appeared in book form as 'Jude the Obscure') due to editorial pressures from Harper's magazine. However, my research has illuminated Hardy's inconsistent revisions, suggesting they may represent his resistance to the censorious eye of the editor, revealing the creative process of this novel. Furthermore, my research has produced a genetic edition of (a part of) this novel, showcasing his process of eroticising its narrative.

研究分野：英語圏文学

キーワード：英語圏文学 ヴィクトリア朝出版文化 トマス・ハーディ 検閲 本文改変

## 1. 研究開始当初の背景

ハーディ研究では、ハーディの小説の生成過程を解明するべく、1960年代以降、いわゆる「草稿研究」が盛んに行われた時期があり、『日陰者ジュード』の原稿（イギリス・フィッツウィリアム美術館収蔵）も、パトリシア・インガム（1976）によって研究されたが、それは、執筆の軌跡の特徴を浮き彫りにするべく実施された研究であり、執筆過程の全容解明には至らなかった（原稿と同じく前=テキストに相当する資料として、初版の校正刷が現存するが、インガムはほとんど関心を払っていない）。なお、インガムの研究に先立って、1953年に校訂版がR・スラックにより編纂されたが、原稿・校正紙内部の異同が捨象された版となっている。

インガムによれば、当時のイギリス社会ではグランディズムという「検閲」制度があり、1)ハーディは『日陰者ジュード』の原稿を初出誌に連載するにあたり、編集者による「検閲」を度々受け、性的な挿話や表現を削除・修正せざるをえなかった、2)ハーディは次第に検閲に先んじて自ら表現を脱エロス化するようになり、原稿には自己検閲の痕跡が認められるという。（“The Evolution of *Jude the Obscure*”, *Review of English Studies* NS 27 (1976)）

しかし、研究代表者（上原）が原稿の一部を閲読したところ、原稿内部には従来の説とは異なりハーディが編集者に対して強かに振る舞い、表現や挿話が当初の構想よりもエロス化されている箇所が少なからずあること、つまり、編集者が必ずしも検閲者として機能しているわけではないということを確認した。これらを国際ハーディ学会元チェアマンのマイケル・アーウィン教授に報告したところ、本格的な研究に着手して研究結果を発表するように、との好意的な意見を得た。

## 2. 研究の目的

トマス・ハーディは、『日陰者ジュード』(*Jude the Obscure*, 初出 1894-95年)の原稿を執筆するにあたり、幾度も修正したが、その生成過程の全容は明らかにされていない。本研究は、ハーディの自筆原稿および校正刷内部の異同を検証することで、この小説の創作過程を解明しようとするものである。

研究者の間には、ハーディが『日陰者ジュード』執筆時に出版社の「検閲」を受け、性的な挿話・表現の多くを削除・修正せざるをえなかったとの言説が流布しているが、本研究では、『日陰者ジュード』の創作過程を検証することにより、従来の説には解消されえない、出版社への抵抗とも言うべきハーディの改変作業に光をあてようとするものである。「検閲」に抗って、ハーディが表現をエロス化してゆくプロセスを、生成批評版という形で可視化させるのが最終目標である。

## 3. 研究の方法

本研究の資料はフィッツウィリアム美術館に収蔵される原稿 377 葉と初版の校正紙 513 葉である。

1)研究時間を有効活用するため、マイクロフィルムのかたちで原稿を博物館から入手し、日本で解読作業を進める。

2)校正刷内部の書き込みおよび、原稿の解読不可能箇所については、休暇中に現地に赴き、目視による判読を試みる。目視でも判読不可能な場合は、デジタル画像をオーダーし、パソコン上で拡大された画像により解読を試みる。また原稿には黒インク、青インク、黒鉛筆、青鉛筆が使用され、筆記具の相違が執筆段階の確定の手掛かりとなる。が、マイクロフィルムやデジタル画像では、黒インクと黒鉛筆の相違や、黒インクと青インクの違いなどが判別しにくくなるため、執筆段階の確定には伝統的な目視作業が欠かせない。現地では判読不可能箇所の解読だけでなく、執筆段階の確定作業も併せて行う。

3)原稿内部の異同を正確に転写し、本文改変をもとに小説(第一部の)生成批評版を作成する。

## 4. 研究成果

### グランディズムという名の「検閲」

フィッツウィリアム美術館に収蔵される原稿 377 葉および初版校正刷 513 葉への書き込み、さらにハーディ宛の出版社からの書簡など、トマス・ハーディ・アーカイブの資料を精査したところ、次のことが明らかになった。

雑誌と書籍との間には承認基準のずれがあったこと

そのずれは、パーラーでの朗読を想定して活字化された新聞雑誌小説とは異なり、連載後に版本化される書籍は朗読だけでなく個人の密やかな営み(黙読)にも供されたために生まれたこと。あるいはまた、その内容は、新聞雑誌の編集者によってすでに審査されていたため、書籍流通の担い手の貸本屋が改めて詳しくチェックする必要が

なかったために生まれたこと

そのずれ (= 「検閲」制度の断層) を念頭に置き、ハーディは連載版では編集者の意向を受け入れて妥協するものの、版本刊行時には削除された箇所をほぼ原稿どおりに復元することで表現の自由を担保する、言うなれば 改変の文法 を編み出すが、その断層をハーディに教えたのは雑誌編集者であったこと

研究代表者による単著 (2025 年 10 月に刊行予定) の第 2 章「グランディズムと小説」および第 5 章「ハーディ 改変の詩学と政治学」として発表する。

#### 『日陰者ジュード』の創作過程

前述のとおり、『日陰者ジュード』の生成過程を分析したところ、編集者に抗って語りにエロス化が図られた箇所が少なからずあることが判明した。その一例が第 4 部第 2 章の挿話であり、フィロットソンとの結婚後に結婚を悔いるようになったシューが自身の結婚の内実をジュードに告白する場面である。この箇所は最初、「友だちとしてなら、フィロットソンは好ましい人なんだけど、わたし、あのひとのこと好きじゃない——わたしにはまるで拷問よ——夫としてあのひとと一緒に暮らすのは！」(第 255 葉) と記されていた。この一節の直後のシューの科白には幾度も手が入れられており、改変とともに結婚の内実をより雄弁にシューが語るようになる。例えば、原稿の初期形のシューは「拷問」のように感じられる理由を「口にすることは憚れるし、わたしが、嫌気がさした、ってことで片付けられてしまうのよ」としか語っていなかった。苦悩は個人的感情に解消されるようなものではないとシューは仄めかしているが、しかし踏み込んだ発言は回避しているため、なぜ「拷問のように感じられるのか」は語りの空白に留まっている。

しかし推敲の過程で、その空白を補填するような方向で加筆が施されている。

「〔前略〕何が拷問のように感じられるかと言ったら、道徳的に いくら立派なひとでも、あのひとに いつでも 忠実に振る舞わなくっちゃいけない、ってことなの！ ——ぞっとする法的契約よ、そんなことって、本来自発的なものの筈なのに！〔後略〕」

愛は「本来自発的」な感情であり、仮に結婚という「法的契約」が愛の強制によってのみ成立するのなら、それは確かに愛とは根本的に異質なもの、ということになる。だがシューの説明が依然として説得力を欠くと言わざるをえないのは、「あのひとにいつでも忠実に振る舞わなければならない」ことがなぜシューにとって「拷問」と感じられるほど苦痛なのか、その因果関係が未だ不透明だからである。ハーディ自身もシューの言葉に歯切れの悪さを感じたのだろう、雑誌 (初出) の段階で本文に手を入れている。

「〔前略〕何が拷問のように感じられるかと言ったら、道徳的にいくら立派なひとでも、あのひとにいつでも応じなくっちゃいけないってことなの！ ——いつも特定の感じ方をしなければならいなんて、ぞっとする法的契約よ、愛の本質は本来自発的なものの筈なのに！〔後略〕」

「あのひとにいつでも忠実に振る舞わなくっちゃいけない」が「あのひとにいつでも応じなくっちゃいけない」に変更された。シューを苦しめるのは閨房での秘事——性の営みであったことが示唆され、寝室におけるジェンダーの権力の非対称性が浮かび上がってくる。言うまでもなく、当時の女性にとって秘事は文字どおり秘めごとであり、決して 口にしないもの だったが、初出の段階で、シューは大胆にも身体的決定権をめぐる問題を仄かしている。「ハーディは次第に検閲に先んじて自ら表現を脱エロス化するようにな」(インガム) どころか、ここには、グランディズムに抵抗するハーディの姿勢が鮮明に打ち出されていると言える。

以上のような発見は他にもあり、それらをまとめて国際研究集会 Global Hardy で発表したところ、エクセター大学のアンジェリック・リチャードソン教授から極めて好意的な意見を得ただけでなく、「イギリス記憶の遺産関連国際共同研究プロジェクト Hardy Correspondents」への参加を懇請された。海外の研究者との学問上の交流を通して、国際共同研究プロジェクトへの参画が決まったことは、本研究の大きな収穫だったと考えている。

なお、『日陰者ジュード』の生成過程に関する研究成果は、研究代表者 (上原) の単著第 10 章「『日陰者ジュード』 - 決別の書」として発表し、生成批評版は、補論「本文の類型論」に組み込む予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 上原 早苗	4. 巻 47
2. 論文標題 Alan Manford, ed., The Woodlanders (書評、招待)	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ハーディ研究	6. 最初と最後の頁 58-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原早苗	4. 巻 88
2. 論文標題 テキスト編纂の文法 ケンブリッジ版の場合	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本ハーディ協会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 3-4
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上原早苗	4. 巻 45
2. 論文標題 「書籍の流通制度改革に向けて」(招待論文)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『ハーディ研究』	6. 最初と最後の頁 89-108
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Sanae Uehara
2. 発表標題 Who's Afraid of Censors?
3. 学会等名 Global Hardy, web conference with Zoom (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 上原早苗
2. 発表標題 解釈の補助線 ハーディの自筆原稿を読む
3. 学会等名 日本英文学会中部支部第72回大会シンポジウム「進行中の作品 文学作品の執筆過程を考える」[ウェブ開催]
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関